〔研究ノート〕

藤沢周「比良」より丸谷才一「樹影譚」，ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』へ

国　松　夏　紀

はじめに　天空の KATOK

2010年秋から2011年秋まで１年間の海外研修の機会に恵まれた。９月末～翌年３月末まで６ヵ月モスクワ，ついでサンクト＝ペテルブルクに同じく６ヵ月の旅程であった。従ってちなみに，「3. 11」はモスクワでその報知に接した。文字通り驚天動地の思い。かつまた遥か彼方より隔靴掻痒の思いでもあった。

それはともかく，そのモスクワ滞在中の個人的小さなエピソードをここに書きつけておきたいのだが，それがどのように「本文」と関わるのか。あるいはどのような意味合いで「本文」の前置きとなるのか，筆者自身いささか心もとなく，不分明であったが，最近日常何気ない機会に突然理解が訪れたように意識された。この「突然の理解」とその状況こそが共通する，冒頭のエピソード，ロシア語風に言えばアネクドートと「本文」を連関させる，そして本文内の三つの論題をも重ね合わせていくテーマなので

キーワード：藤沢周，「比良」，丸谷才一，「樹影譚」，ドストエフスキー

あろうと。

還暦過ぎて初心に帰り，モスクワでもサンクト＝ペテルブルクでも週５日ロシア語学校に通学していた。午前10時から午後２時まで，日本，韓国を含めた諸国からのより年若い受講者たちに交ざって久々の学生気分であった。するうちに運動不足というかストレス解消のためもあって，なぜか突然，唯一可能な運動種目，アイススケートをしたくなってきた。まずスケートリンク探しからから始めた。スケートリンクのことをロシア語でKATOK（カトーク）と称する。いろいろ苦労してようやくつながったインターネットで検索し詳細な地図[1]で位置を確認し，一つ見当をつけた。

モスクワ大学の一画に（歳甲斐も無く？）ホームステイしていたのだが，最寄りの地下鉄駅はソコリニーチェスカヤ線の大学（Университет）駅であった。ここからロシア語学校へは，文化公園（Парк культуры）駅で環状地下鉄線に乗り換え，白ロシア（Белорусская）駅下車徒歩15分ほど。ちなみに，この地下鉄駅はベラルーシ方面の鉄道駅にも接続する（つまり知られているようにロシアの駅名は行く先・終点の地名となる）。また，近年シェレメチェボ空港行の特急電車も発着するようになった。この白ロシア駅と文化公園駅の中間にキエフ（Киевская）駅がありここもウクライナのキエフ方面への鉄道駅と隣接している。ネット情報と地図とをつき合わせてみるとキエフ駅の駅前，ヨーロッパ広場（Площадь Европы）にスケートリンクがある筈であった。ここなら通学途中に立ち寄ることが出来，至便と探索に出かけた。もう雪が積もっていたと記憶する。ヨーロッパ広場はすぐに見つかったが，スケートリンクらしきものは影も形も見えない。あちこちだいぶ歩き回った末，ほぼ諦めかけていたところ，（漫画風に言えば，ガガーン！　もしくは雷光の如きイラスト）背後にある高層建築の高みから，ある圧力が集中して貫く棒の如きものとなって意識され，思わ

ず振り向く高みに，KATOK という広告文字明らかであった。下から見上げてもガラス張りのリンクであることが判る。状況を反省してみれば，リンクを上方に予想していなかったことが発見を遅れさせたか，或いは，一度見ていたかも知れず（デジャヴュ）それが見ていない時に意識されたのかも知れない。さらに，こちらの探究意欲と KATOK との呼応のようなことも，まったくありえないことでもなかったろう。

そうそこは，新興ショッピング・モールの最上階の円形スケートリンクであった。同じ建物内の大手ブランド・スポーツ店でのスケート靴購入（日本から，荷物になるのでマイシューズは持参していなかった），ブレードの研ぎ出し研磨，そして学校帰りに何度か通ったことなどについては割愛しておこう。一つだけ。キエフ駅前は時々物騒な集会があり，足が遠のいたりした（今日のウクライナ情勢と何か関係があったろうか？）。

噂に聞いていた通り，暮れから新年にかけて「赤の広場」にアイススケートリンクが設置された。一度だけ滑って見たが，時間入れ替え制であり，滑り心地は芳しくなかった。

ステイ先近辺で，屋外天然氷結リンクを発見したこともある。これも一度だけ試みたが，天然だけあって，氷面の凹凸が自然のままで，持前の滑走能力では危うく，一度でコリタ。

かくしてモスクワを去る 3 月末，出先からホームに帰宅して来た際，ふと木立の蔭の鉄柵に気がついた。今は使われていないが，どうやらスケートリンクらしかった。モスクワ大学構内，自宅の前がそれはあったのだった。

1．藤沢周「比良」より

表記の小説を読むことになり，「拾い物」をすることになったのは偶然のことであった。

文芸誌を定期購読する習慣を持たず，毎月初めの新聞広告で見当をつけ１冊か２冊購入する程度。その月，目当ては特集＜『「ボヴァリー夫人」論』の衝撃＞であった。ちょうど蓮見重彦の大著『「ボヴァリー夫人」論』が出ようとしている時[2]で，フランス語が出来る訳ではないが，この小説にはかねて関心を持っていたので『文學界』７月号を購入。観音開きの目次を眺めていて「比良（ひら）」が目についた[3]。これもかねて関心を持っている琵琶湖周辺，関連する本を少しは読んでいる[4]し，実地にも歩いている[5]。また，潜在的には，亡父の先祖は近江商人の出だと聞いた定かならぬ記憶がある。貿易商で，豊中だったかにダンスホールのある豪邸に住まう「大阪の叔父」等の話と錯雑した作為であった可能性大なのではあるが。それはともかく，10ページと短いのが良い。

主人公「私」は「物書きという仕事」をしている「だらしない中年男」で，「新潟の漁師町に生まれ育った自分」とあるところから，作者（藤沢周）とも重なるように配慮されている。物語冒頭の３月現在，湖北の向源寺（渡岸寺観音堂）にて十一面観立像に対面し数年前と違う違和感に苛まれている。かつては『近江山河抄』（白洲正子の名はあげず）など引きながら「ただただ美しいとしか思わなかった」のだが。その時一緒に脇にいた女と恐らくは同じ女性と喧嘩別れして来たところなのである。彼女は世田谷のマンションに住み，「私」は横浜から通い「２週間ぶりの朝の気だるさと洞（うろ）のような疲れ」のなか，同居かより近くに住まうことを求める女との「小さな諍（いさか）い」から，気まぐれな思いつきでここまでやって来た。思えば彼女は，数年前「家族と別居したばかりの」中年男の自分が傾いて行った「一回り以上も歳下の女」であった。

ここで現代風「私」の「妻問婚」と小野家出自との連想から「通小町」伝説が語られる。小町の難題百夜通いを九十九夜までクリアし，残る一夜の百夜目にして病に倒れ亡くなった深草の少将の物語。鬱々たる気持ちの

藤沢周「比良」より丸谷才一「樹影譚」，ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』へ

まま，琵琶湖畔に出た「私」は，その開放空間でようやく十一面観音との対面から来る不快感を脱する。

「さっきまでの十一面観音にせせら笑われ，怒られ，さらには慈悲の眼差しで見つめ下ろされた気分の沈みが，この厖大な琵琶湖と風景に癒されるのか。」

まことに，琵琶湖と比良を含む周辺山地と天空の創り成す時空間は圧倒的迫力を有する。

「私が目にしているのは，海よりも美しく，怖い風景，ということだった。

——恐ろしい，風景，だ……。

茫漠が閉じ込められている。

とてつもない広さと時間が閉じ込められて，逃げ場がないように思え，息苦しくもなってくる。かすかに雪の残る比良山の稜線が清廉で優美なのを見て，「大丈夫だ，大丈夫」と自らに言い聞かせてみるが，まったく自分の知らなかった原風景への臍帯（さいたい）に絡め取られて，湖に縛りつけられるような恐怖を覚える。」

「渡来や戦も含めてはるかな歴史の澱が沈み込んでいる地の力を，何処かで感じている」

このような琵琶湖の時空間で展開する小エピソードが「私」が関わり，地元の釣り人と「みっつちゃん」によって演じられる，徘徊老女「田口のばっちゃん」救出劇である。

「比良八荒」の起源説話の語り部「田口のばっちゃん」に「堅田の和尚」と間違えられたらしい。「堅田の和尚」は，自分を慕う娘に百日通いを言いつける。むすめはたらい舟をこいで夜ごと湖面を渡る。その執念に恐れをなした修行僧は，百夜目に目印である浮御堂の灯りを消してしまう。目印を失った娘は折からの突風（これが「比良八荒」の起源）によって湖底

に沈んだ。「カタタのオッさん」すなわち「私」は裏切り者，悪人という訳である。

しかし，この琵琶湖時空のもとで，「私と女」の恋慕と「小野小町と深草少将」の恋慕，そして「堅田の修行僧とたらい舟の娘」の恋慕は，「田口のばっちゃん」と「みっつちゃん」の姿を借りて，ここにピタリと重なり合い，一瞬，理解の光明が透射される。

「また，二人の方に視線を戻すと，深々とお辞儀している。そして，しっかりと手をつないで，すらりとした背中と曲がった背中を見せた。

百夜通いを強いて，やがて老いさらばえた女と，百夜通いを強いられて湖底に沈んだ女が，手をつないで歩く影……。

振り返ると，薄紫色にほころんだ雲の合間から，強烈なほどの銀色の日の光が斜めに零れて琵琶湖の表に差していた。

神の階（きざはし）……。

光の粒子が集まってできたような透明光線が，琵琶湖の水面をさらに銀色にさんざめかせている。眩しさに目を細めて，二人の女の背中を追おうと視線を戻したが，もうその影はなかった。　　＜了＞」

この時空の重なり合いと透射の感覚は，藤沢周の芥川賞受賞作『ブエノスアイレス午前零時』[6] などにもすでに見られていたものであろう。ただし，この重なりあいは，まず新潟と福島の県境辺の温泉旅館（ととりわけ，温泉卵）と110坪のコンベンション・ホール（ダンス・ホール）とのミスマッチとして現れる。しかし，実家は地元の豆腐屋元広告代店勤務カザマと盲目の老女，元横浜の娼婦（？）との伴奏曲を無視したタンゴのダンスは，日本とアルゼンチンを重ね合わせ，時間をも超えて，ブエノスアイレスに新潟の雪を降らせるのである。

「比良」に戻れば，イメージの十全な重層とそのカタルシスは，久々に丸谷才一の「樹影譚」を想起させた。かねて個人的に「最高傑作」と吹聴

藤沢周「比良」より丸谷才一「樹影譚」，ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』へしていた作品であるが，これが調べてみるとかなり「一般的評価」なのであった。

2．丸谷才一「樹影譚」へ

私事ながら，亡母は鶴岡の出で，才一さんは神童と呼ばれた，と聞いた遠い記憶がある。もっとも，丸谷が尋常小学校在学中の昭和10年，母は上京，父のもとに嫁いでいるので，その噂に「現場」で接したかどうか定かではなく，そもそも筆者自身の記憶も根拠薄弱である。にもかかわらず，やはり母と同郷の作家ということで，筆者としては全く一方的な，身内意識というも大袈裟な，とりとめもない親しみを感じていることは事実である。

「樹影譚」は単行本・短篇集『樹影譚』[7] が出た時に読み，その末尾の一節に圧倒的な感動というかカタルシスを覚えた。筋書きとかの論述に先回りしていきなり引用してしまおう。(「樹影譚」諸版校異は別掲参照[8])

「三度？」

と小説家は思はず問ひ返し，老女を見た。薄くらがりのなかで脚を投げ出してゐる白髪の女は，見返さずに，人間の言葉を習い出したばかりの者のあどけない声を巧みにまねて，まるで鳥のさへづりのやうに，呪文のように言つた。

「キノカゲ，キノカゲ，キノカゲ」

古屋は銀屏風を見た。ランプの焔が揺れ，五本の欅の影が，風の渡るやうにゆらいで伸び縮みした。影が静まり，また乱れた。彼はそのとき，まことに不思議なことに，自作のどこかに「樹の影」を三度くりかへす登場人物が現れるのをこの女が記憶してゐて，それが狂つた意識に働きかけ，かういふ過去を贋造したのだらうとは考へなかつた。自分の母は誰なのかとも，この女が母かもしれないとも思わなかつた。

ただ，ざはめく影の樹々のなかで時間がだしぬけに逆行して，七十何歳の小説家から二歳半の子供に戻り，さらに速度を増して，前世へ，未生以前（みしょういぜん）へ，激しくさかのぼつてゆくやうに感じた。（【単行本】pp. 130-131）

この疾走感は，これまでに語られてきた全篇の樹の影たちすべてのイメージがピタリ・ピタリと音を立てて重なり合い，そこを透徹して読者にも「とつぜん解釈が訪れた」（【単行本】p. 119）ことから来るものであったろう。喩えて言うならば，諸所に散在していた朱塗りの鳥居が突然集中して「千本鳥居」が現出したような。

さらに，この「前世へ，未生以前へ」の超自然的疾走感は，ソーントン不破直子の指摘する通り「夢の中」と考えると一番自然なのかもしれない[9]（p. 144）

つまり，作者自身が高く評価し，その冒頭三章分を【限定特装版】別冊付録に再録した三浦雅士の『出生の秘密』における次のような一節になると，いささか言い過ぎというかあまりにもハマりすぎと思えてしまうからだ。

だが，『アンチ・オイディプス』という逆光によって浮き彫りにされたラカンの「精神分析の哲学」が，たとえば短篇『樹影譚』の読解に，新たな，そして鮮烈な照明を与えることもまた，疑いないのである[10]。（p. 100）

ただ，それ以下に続くこの本書第三章「無意識の魔」末尾の，三浦雅士の「樹影譚」分析記述（pp. 101-104）は，作品内の謎ときと同様の爽快感を与えるとだけは言っておこう。

いささか先回りしてしまった。「樹影譚」冒頭に戻ろう。つまり，作者と作品名について，取り敢えず確認しておきたい。一見自明と思えるが，すでにこの辺から作者の企みが感じられるからである。

1，2，3と三つの章から成るこの短篇小説は「樹影譚」と題され，作者名は「丸谷才一」。彼が著作権を有する第1の作者であることは間違いあるまい。「1」の冒頭から「わたし」がその樹の影マニア（現代の言葉遣いなら，「フェチ」とも言われかねない）振りを語る。この「わたし」も小説家である。取り敢えず，これを第2の作者としておく。この第2の作者は，「1」を前置きとして，「2，3」に提示される短篇小説を書いている。「書いている」のであって，読者はそれを同時並行的に読んでいる。その短篇小説の主人公が古屋逸平，八十歳近い高齢の作家でやはり樹の影マニアである。これが第3の作者。

素直な読者は，「1」の「わたし」も「2，3」の古屋逸平の物語の作者＝語り手も丸谷才一自身だと疑わず，そんなことは特に意識せずに読み過ごすだろう。「わたし」が読者をその方向に誘導しようとしているのであれば，尚更である。

「樹影譚」は，「樹の影偏愛家の自分探し」の物語，とでも要約出来るだろうか。愛好するのは影であって樹そのものではない，作品テキスト自体が，作者のイデアの影にすぎない，などと。しかし，注意深く読んでみると，愛好の対象は影とその本体双方相俟ってであるようだ。

> 「素気（そっけ）ない平面がいい。さういう広い面積の前に立木があつて，そこに影を投じてゐると，その形影相伴ふ趣が心をゆすぶるらしい。」（【単行本】p. 49）

これは，冒頭小説家「わたし」の述懐。次は，その「わたし」の作中人物，同じく作家の古屋逸平の自分探し大詰め。

> 「そのとき，若い女がまづ桑の中卓を屏風の前に据ゑ，次に別の女が盆栽を運んで来て，中卓に飾った。二人が身を引くと古屋は思はず息を呑んだ。樹々の影が二枚つなぎの無地の銀屏風の，彼と向かい合ふ右の面に，あざやかに浮び出たからである。煉瓦いろの釉（うわぐすり）なめ

らかに焼いた長方の鉢のやや左手に，おそらく欅だらう，まだ落葉しない五幹の老樹が，根張り八方逞しく，立ち太く，しかし銀の夜空に向かつて鋭く伸び，背後の，やや大きくていつそう優美な，黒い影と交錯してゐる。」（【単行本】p. 123）

ここまでは判るとしても，先ほど引用した作品末尾の「ざはめく影の樹々」となると，形影いずれとも判別し難いようだ。

第２章以降の主人公，作家の古屋逸平。指摘するのも大人気ない，と誰も指摘せずとも判り切っているのであろうが，念のため敢えて言っておくと，作者の丸谷と古屋は字面は異なるが，音は「マルヤ」と「フルヤ」で一音違い，明らかな語呂合わせ，古屋を丸谷に引き寄せようとしているかに見える。さらに，ついでにつけ足しておくと，才一の「イチ」と逸平の「イツ」も語呂合わせに近いであろう。

「わたし」を丸谷と「思わせ振り」は念が入っている。「樹の影」の深層・真相探究の物語を構想したが，ナボコフに同工異曲の先例あり，執筆断念。こういうことは必ずしも稀ではないとし，「寡作（かさく）の言ひわけと取られたら心外だけれど」（【単行本】p. 54）として，ボウ・タイ種（ネタ）について語る。寡作にしろ，蝶ネクタイにしろ流布した丸谷才一自身のプロフィールだろうし，さらに「文学の伝統を重んじながらしかもプライオリティを気にする小説家」（同 p. 58）と来ては，丸谷の他を探すのは難しい。

さらにまたこの「思わせ振り」は念入りに「わたし」とその作中人物「古屋逸平」が創作した長篇小説『海流瓶』（昭和三十年代の作）の登場人物「ムショ帰り」の青年との親近性にまで及んでいる。

いろいろ考えてもなお「樹の影」愛好の謎が解けない「わたし」は，「答を出すことを諦め，そもそもこれが問ふに値することかと疑ひ，次いで，この種の些末な謎をたくさんかかへて生きるのがわれわれの人生だと自分に納得させたのだつた。さういふ諦めを自分に強ひることは，これま

藤沢周「比良」より丸谷才一「樹影譚」, ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』へ

で何度も練習してゐるから，わりあひ易しいのである。」（同 p. 54）

一方身を寄せている母親の家の前で醜態を演じた若者は，「悔やむのに飽きると，今後の身の振り方を考へ，明日からはまともな仕事を探そう，そりの合はない長兄や次兄に頼むのは癪にさはるが仕方がない，実直に働いて僅かな金を稼がうと自分に言ひ聞かせた。自分で自分に諭すのは，これまで何度もしてゐるからむづかしくない。」

丸谷＝「わたし」から古屋逸平を介して，作者の夢が作中人物に継承される。あまりにも図式的にピタリと「ハマル」と，素直でない読者はかえって首をかしげることになる。それに何より，引用文を転写していて，否応なく気付かされる。この旧仮名遣い，歴史的仮名遣いが許容されるのは，作家丸谷才一ならではのことではなかったか，と。

どうやら，まんまと作者が設えた「罠」にはまってしまったようで，この辺で一先ず「リセット」するに如くはなさそうだ。そうは思いながら，やはり気になるのは，作者の問題とも重なりあう「ナボコフ」問題である。そのミスティフィケーション（「樹の影」ネタの執筆を断念させた作品が見当たらない）は，注意深い読者には，かなり解き易い謎，仕掛けのように見えるが，どうだろうか。

本作のテーマとこの問題に関して【特装版】[11] 巻末「三つの短篇」で自作自註が次のように試みられている。「あの短篇小説については，いつたい何を書こうとしたのかとよく訊かれます。ベルリンで朗読したときも質問された。これは簡単で，世の中で一番不思議なのは自分が今ここにゐるつてこと，といふのを書きたかつたんです。素朴な話ですけれど，でも実に怖い。」（p. 148）

「あの思ひ違ひはわたしの体験を使ひました。多分，夢で見て，それで落胆し，断念をしたのでせうね。小説家といふのは，熱中してくると，人物だの何だのが夢のなかまで追ひかけて来ることがあるんです。この場合

は追ひかけ方が入組んでゐたけれど。二年か三年，いや，もつとかもしれない，先行作品があるんぢや仕方がないとはふつて置いて，しかし，どうしても諦め切れず，念のためナボコフの短篇小説を捜して見たら，ないとわかつたのでした。」（p. 149）

読者＝筆者（評者）としては，何をか言わんやと思われる一方で，この自作解題もまた，三浦雅士の『出生の秘密』とともに新たに「樹影譚」に組み込まれ，より一層錯雑する影を本作に投げかけ，その本体の形を見え難くするのかもしれない。

そこで，「樹影譚」末尾に倣って，「キノカゲ，キノカゲ，キノカゲ」と三度呪文を唱え，言わば胎内回帰から「父親殺しの物語」，ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』へ話を転じることにしよう。

３．さらにドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』へ

今年（2014年度）春学期，共通教養特別講義を担当し，受講生と共に『カラマーゾフの兄弟』とつき合うことになった。題して「『カラマーゾフの兄弟』を読んで・見る」――原作解説と映像鑑賞をセットにしたもので，受講生からの反応により改めていろいろ気付かされることも多かった[12]。

もうずいぶんと前のことになるが，「様々なる物語の連鎖」として『カラマーゾフの兄弟』を論じたことがある[13]。

その他市民講座など，『カラマーゾフの兄弟』について語る機会は何度かあった。それらの時々に考えたことどもが，藤沢周「比良」―丸谷才一「樹影譚」との重層・重奏を契機として，作品内の様々な物語が言わば整然とまた重層化・重奏化し，生と死と再生のテーマ，「一粒の麦」のイデエがより鮮明になったかに思われる。その重層・重奏のイメージ，伏見稲荷大社「千本鳥居」のイメージ，その概略を記しておこう。

「父親殺しの物語」

エピグラフは，『ヨハネ福音書』第12章24節から，一粒の麦の喩え。一粒の麦は，死ななければ多くの実を結ばない。死んでこそ多くの実を結ぶという，生と死のパラドックが記される。これが作品全体を包み込む大いなる光源[14]。

第１篇で，13年前の父フョードル・カラマーゾフの謎の死が告げられる。兄弟の母親たち，長男ドミトリーの母アデライーダ，次男イワンと三男の母ソフィアもすでに亡くなっている。（スメルジャコフの出生と母スメルジャシチャヤの死については，第３篇で語られる）

これを「前画」としエピローグ最終章のイリューシャの葬儀，アリョーシャの誓いの演説を「後画」とし，『カラマーゾフの兄弟』はこれら両画に挟まれ，同工異曲の様々な「画」（シークエンス）が重層し，それらがピタリと重なりあった時，それらを理解の光が貫くかに思われる。

【死すべき「一粒の麦」たち】を列挙すれば，父フョードル・カラマーゾフ（他殺，謎の死）を筆頭に……

母たち；アデライーダ（病死），ソフィア（病死），スメルジャシチャヤ（出産死）。

（大審問官に「魔女」たちは焼き殺されるが，再臨のキリストは放免される）

ゾシマ長老（大往生）と兄マルケル（病死）……「謎の客」（病死）。

長男ドミトリー（心の死からの甦り）。

次男イワン（心の死）。

　　スメルジャコフ（自殺）。

三男アレクセイ（不信からの甦り）。

針入りパンを食わされた犬のペレズヴォンは，ジューチカとして甦る。

イリューシャの死（病死），アリョーシャの演説と子供たちの誓い。

なかでも最も美しい【シークエンス（画）の重層】は，大審問官へ復活

のキリストの接吻と大審問官伝説の語り手（創作者）イワン・カラマーゾフへの弟アレクセイの接吻（「キリストのまねび」）であり，この兄弟関係もしくは兄ドミトリーをも加えた兄弟関係の下層には，若きゾシマと夭折の兄マルケルとの兄弟関係がある。

注

1）［文献①］文字通り「１戸毎に」記載されたモスクワの詳細地図で大いに役に立った。
2）［文献②］800ページを超える大著。一つの小説作品について言いうることのすべて？
3）［文献③］タイトルには，目次・本文共に「ひら」とルビ。
4）［文献⑤，⑥，⑦，⑧］このうち，とりわけ，⑧は，『図書新聞』連載中愛読した。
5）［文献⑨］文献ではなく「文献等」の，体験談。関東の人間には興味深い土地柄。
6）［文献④］品切れ状態であったが，舞台化に伴い増刷された。
7）［文献⑪］内容詳細は，文献の付記を参照。
8）諸版に目立って大きな異同はない。専ら筆者の好み（装丁，字面）で単行本をテキストとする。
9）［文献18］「樹影譚」を「横しぐれ」との関係で論じている。本そのものも丸谷才一論としてユニーク。
10）［文献⑰］思想軸としてのフロイトの重要性に目が開かれる思いがする。
11）［文献⑬］別冊付録に長年の相棒，和田誠のエッチング，何やかや各種詰め込んで，の玩具箱のような書物。
12）［文献⑲］講義概要を参照。
13）［文献㉔］執筆時の表記は，ドストエフスキイ『カラマゾフの兄弟』で，当時のママとした。
14）［文献㉑］文語訳の格調は言うまでも無いが，ここだけ文語というのも可笑しなものだ。

「比良」より文献等

①«Атлас Москвы»с каждым домом большой. Выпуск 14. 2010-2011 гг. АГТ-Геоцентр.

②蓮見重彦『「ボヴァリー夫人」論』2014年６月，初版１刷，筑摩書房刊。

③藤澤周「比良」―『文學界』平成26年７月号（文藝春秋）pp. 72-81（200字詰め原稿用紙に書き写してみると，56枚。従って400字詰め28枚ほどか）。

④藤澤周「ブエノスアイレス午前零時」初出『文藝』1998年夏季号（芥川龍之介賞受賞作）。

単行本1998年，河出書房新社刊。

河出文庫　新装版初版『ブエノスアイレス午前零時』2014年10月刊による。

⑤司馬遼太郎「街道をゆく／湖西のみち」『週刊朝日』連載1971年１月１日号～。

単行本1971年９月，朝日新聞社刊。

朝日文庫『街道をゆくⅠ』＜新装版＞湖西のみち，甲州街道，長州路ほか 2013年６月　第６刷による。

＊司馬さんの25年に亘る『街道をゆく』旅は「湖西のみち」から始まる。「湖西のみち」小見出し／楽浪（さざなみ）の志賀，湖西の安曇人（あずみびと），朽木渓谷（くつきけいこく），朽木（くつき）の興聖寺（こうしょうじ）。

⑥白洲正子『近江山河抄』1972年（昭和47年）62歳　８月～『芸術新潮』に連載10回。

単行本　1974年２月，駸々堂出版刊。

講談社文芸文庫＜現代日本のエッセイ＞1994年３月１刷，2005年５月15刷による。

＊比良の暮雪，沖つ島山，伊吹の荒ぶる神，その他。

⑦白洲正子『十一面観音巡礼』1974年（昭和49年）64歳　１月～１年半『芸術新潮』に連載。

単行本　1975年12月，新潮社刊　同1996年５月，13刷による　＊湖北の旅。

⑧高橋真名子『近江故事風物詩　さざなみの回廊めぐり』2009年12月，河出書房新社刊。

初出『図書新聞』に「さざなみ回廊」として連載（平成19年１月～20年６月）に加筆訂正。　＊Ⅰ十一面観音から白山の女神へ　湖北の観音堂，湖北のヴィーナス。Ⅳシコブチ神社から鯖街道へ　比良山という聖地等。

⑨実地に　家族で雄琴温泉に泊まったことあり，いつのことか関西移住後間もなく。箱館山でスキーをした。夕方になりリフト不調（？）で暗くなってくる中，下山まで長時間行列して待たされた。
歌人かつ宗教学者の義父と湖中鳥居の幽玄な白髭神社に行った記憶あり。
朽木谷にも行ったはずだが，ハッキリした記憶がない。
晩春海津大崎の名残の桜見物にドライブし一方通行の関係もあって湖西のから湖北へ一周してしまったこともあった。その間，渡岸寺の十一面観音初拝観。
湖中の沖島に渡ったり長命寺にも行った。
最近は，元旦に，向源寺（渡岸寺観音堂）に初詣。新年早々，十一面観音拝観。

○丸谷才一「樹影譚」
⑩【初出】「樹影譚」　『群像』第42巻第４号（1987年４月，講談社）pp. 6-40
⑪【単行本】『樹影譚』1988年８月１刷，同年９月３刷，文藝春秋刊による
　同書には，「樹影譚」の外，その前に「鈍感な青年」，その後に「夢を買ひます」を収録。前者初出は『文學界』1986年１月号，同じく後者は『新潮』1987年12月号。即ち，この単行本『樹影譚』には，日本の文芸出版の三大大手，文藝春秋社，講談社，新潮社の老舗文芸雑誌に相前後して掲載された三作品が収録され，しかも㈱文藝春秋から刊行されている。流石丸谷才一というべきか。
　なお，「樹影譚」は，川端康成賞受賞作（川端賞は新潮社肝いり）
　また，丸谷才一による和田誠装丁本のうちでも最良ブック・デザインの半透明カバー裏には，大江健三郎（川端賞選評），三浦雅士（文芸時評），小島信夫（創作合評）が影の如く印刷されている。
　装丁に関連して，半透明カバー表は，書名・作者名に透けて，本体表表紙の「エンブレム」樹影譚・丸谷才一が透けて見える。どちらがどちらの影とも決め難く。
⑫文春【文庫】『樹影譚』1991年７月，2013年９月５刷による。収録作品は単行本と同じく，「樹影譚」を挟んで「鈍感な青年」と「夢を買ひます」。
⑬＜作家生活50周年記念出版＞「【特装版】　樹影譚」限定200部，平成20年

（2008年）12月，中央公論新社刊。収録作品は，単行本，文庫本と同じ。ただし，巻末に自作解題的「三つの短篇小説」pp. 147-154 及び「あとがき」p. 155（文末に「二〇〇八年十月十二日深夜」の記載）があり，いずれも本＜特装版＞にのみ見られる。

＜特別付録＞

・和田誠描き下ろしエッチング一葉。

・『ふるさと富士』— 玩亭新句帖（丸谷才一），装丁物語（抄，和田誠），出生の秘密（抄，三浦雅士。同書名単行本，全16章の冒頭３章分転載）

＊この特装本のこともその広告のこともすっかり忘れていたのだが，この度久々に単行本を読み返す際，ページの間からハラリとその広告の切り抜きが落ちて来た。2008年12月11日（木）朝日新聞紙上広告。書込み「入手叶わず 12／11」とあるのは，47250円という高価格故でもあったろうか。

⑭≪12巻本丸谷才一【全集】≫第４巻，2014年６月，文藝春秋刊に「裏声で歌へ君が代」とともに収録，pp. 519-569。本文底本は，文春文庫４刷（2012年11月）

＊2008年に作家生活50年を祝った丸谷才一は，その４年後，2012年10月13日に生涯を閉じた。文庫４刷は「著者存命中の最終版」ということでもあろうが，厳密に言えば，10月13日に亡くなった人が，11月の出版物をチェックすることは困難であろう。さらに厳密に言えば，午前７時25分都内の病院で心不全，ご永眠と伝えられたので，例えば，前日に病床で校正された原稿に基づき翌月刊行ということがあり得ぬ事ではなかろうが。

⑮第137回「創作合評」1987.3.13.『群像』（講談社）1987年（昭和62年）５月号

鼎談：小島信夫，三木卓，川村湊。丸谷才一「樹影譚」は pp. 272-282. 他に山本道子「手首」，林京子「虹」を合評。言うまでもなく，「樹影譚」初出は，同じ『群像』の前月５月号である。

⑯村上春樹『若い読者のための短編小説案内』のうち（pp. 151-177）丸谷才一「樹影譚」。

初出「本の話」（文藝春秋刊）1996年１月号～1997年２月号まで連載。

単行本　1997年，文藝春秋刊。

文春文庫　2004年10月１刷，2013年７月９刷による。

なお，文庫本；丸谷才一「樹影譚」末尾 p. 177 には，後出の三浦雅士に対する応答が加筆されている。以下，その全文を引用しておく。

> ＜注・この本（単行本）が出たあとで，三浦雅士さんからご指摘を受けたのですが（「群像」平成16（2004）年１月号），この批評は現実に存在しているそうです。マルト・ロベールの「起源の小説と小説の起源」という，批評の世界ではずいぶん有名なものであるらしい。ぼくは文芸批評という分野にはまったく不案内なので，恥ずかしながら知りませんでした。しかし，決して開き直るわけではありませんが，ほとんどの読者の皆さんも，僕と同じようにマルト・ロベールさんのことをご存じないのではないでしょうか？（もしご存じだったとしたらすみません）とすれば，僕のような「降雨確率」的な予想（仮説）も，ある意味では現実的な蓋然性を持ちうるのではないかと，僕としてはちょっと考えてしまうわけです。テキストについてのすべての事実関係を知らなくてはそのテキストを理解することはできないということではないのだから。そしてまた，僕はつい考えてしまうのです。もし僕の仮説（八〇パーセント）が的中していて，これが丸谷さんのまったくのでっちあげだったとしたら，それはそれで素敵だったろうな，と。もちろんでっちあげじゃなくても，「ひょっとしたらそうじゃないか」と読者に思わせるだけで（あるいはふと迷わせるだけで），効果は十分に発揮されているわけですが＞

⑰三浦雅士『出生（しゅっせい）の秘密（ひみつ）』初出『群像』2004年１～11月号，2005年１～４月号連載。15章「孤独の発明」は大幅改稿，16章「魂の悲哀」「あとがき」は書き下ろし。

2005年８月15日１刷。同年12月27日２刷，講談社刊による。ちなみに「帯」の惹句は「漱石研究の新解釈／衝撃作『青春の終焉』に続く新たな地平―精神分析，元大思想から漱石，丸谷文学までを貫く“秘密”を論じて，読む快感の小説論！」

これに対して作者 丸谷才一は我が意を得たと思われる。＜特装版＞巻末「三つの短篇小説」から引用しておく。

「その（1997年『若い読者のための短編小説案内』における村上春樹の「樹影譚」評；引用者注）あとで三浦雅士さんの『出生の秘密』が現れます。この件については，そのうちに『樹影譚』論からはじまる長篇評論を書く，と予告を受けてゐた。しかし，せいぜいが序章でちょっとマクラに振る程度と思つてゐたのに『樹影譚』論が三章もつづき，そこで提示された主題が変奏を重ねながら全体を貫く。批評家の力量に驚いたり，おもしろがつたりで，あの連載がつづいてゐることの「群像」はずいぶん読みごたえがあつた。

三浦さんについては，文学作品の審美性に対する感覚と評論構築の論理能力とを併せもつ点で山崎正和さん以来の才能，といふのが前まへからの評価でしたが，それを再確認した。特に夏目漱石論が，たちが悪いくせに品格のある人間洞察によつて魅力に富む。

そしてわたしは，話題が多岐にわたるたびに，これだけいろんな話を取上げることができるのも『樹影譚』があの根本的な謎の物語だからだ，などと得意になるのだつた。もちろんこの態度は幼稚だし，間違つてゐるが，日本の文藝評論に退屈してゐる身としては，こんなに派手な藝を見せられると，つい，それを種ににして自慢したくなるのだらう。」

⑱ソーントン不破直子『戸籍の謎と丸谷才一』2013年10月，春風社刊。pp. 111-153.

第一部 第３章『横しぐれ』から「樹影譚」へ――読者である作者――

⑲2014年度春学期 共通教養特別講義「ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』を読んで・見る」［教材］著作権承認 DVD；TV 放映版，ディスク６枚組，１枚につき２回分収録，ロシア語音声（ステレオ），日本語字幕。カラー。合計527分（89＋87＋87＋87＋88＋89）。木曜日３時限全15回（受講登録214名），毎回コメント・ペーパーにストリーを書かせ，授業最終日に教場レポート提出。その課題は，

［１］ロシア・テレビ版『カラマーゾフの兄弟』全12回のうち，最も秀逸と思われるシーンをめぐり，その概略と作品全体の中での位置付け，そして記憶に残った理由等について述べなさい。

［２］フョードル・カラマーゾフの死は，誰に罪が有り，誰に罪は無いか？≪神が無ければ，すべては許されて在る≫，或いは≪万人は万人に対して罪

が有る≫という考えを手掛かりとして論述しなさい。

⑳原作日本語訳，亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』光文社［古典新訳］文庫版全５巻第１巻2006年９月初版１刷～第５巻（エピローグ別巻）2007年７月刊。

㉑『カラマーゾフの兄弟』エピグラフ『ヨハネ福音書』第12章24節の日本語訳。

【文語訳】「誠にまことに汝らに告，一粒の麦，地に落ちて死なずば，ただ一つにて在らん，もし死なば，多くの果を結ぶべし。」（岩波文庫『文語訳 新約聖書 詩篇付』2014年１月１刷，２月２刷による）

【現代口語訳】［新約聖書翻訳委員会訳］「アーメン，アーメン，あなたがたに言う。麦の種が地に落ちて死なないならば，それは一つのままで残る。だが，死ぬなら，多くの実を結ぶ。」（小林稔訳）＜新約聖書Ⅲ＞ヨハネ文書，岩波書店，1995年８月１刷，９月２刷による。

［亀山訳］「はっきり言っておく。一粒の麦は，地に落ちて死ななければ，一粒のままである。だが，死ねば，多くの実を結ぶ。」前記光文社［古典新訳］文庫版『カラマーゾフの兄弟』第１巻による。

㉒高野史緒『カラマーゾフの妹』（第58回江戸川乱歩賞受賞作）講談社，2012年８月刊。

㉓高野史緒『ミステリとしての「カラマーゾフの兄弟」スメルジャコフは犯人か？』＜ユーラシア・ブックレット＞No. 181，東洋書店，2013年５月。
父フョードル殺し，スメルジャコフは仕掛人，動機は，自分を私生児として蔑視するカラマーゾフ一族への復讐。長男ドミトリーには刑法上（？）の罪あり，イワンには倫理的，哲学的，神学的罪悪感，アレクセイ（アリョーシャ）が実行犯！？

㉔国松夏紀：ドストエフスキイ『カラマゾフの兄弟』を読む／様々なる物語の連鎖――富田仁編著『欧米文学を読む』1986年７月，花林書房刊，所載。

「樹影譚」諸版校異　【初出】，【単行本】，【文庫本】，【特装版】，【全集】

【初出】	【単行本】	【文庫本】	【特装版】	【全集】
p. 6 飯倉	p. 47 飯倉	p. 51 同	p. 41 同	p. 521 同
p, 6 銀杏	＊以下全ての版でルビは「いちよう」であるが，「いちやう」乃至「いてふ」が正しいか？			
p. 7〈上〉模様入りといふと奇妙に聞えるかもしれないが	p. 49 つまり	p. 53 同	p. 42 同	p. 522 同
p. 7〈下〉鬱蒼と	p. 49 鬱蒼と	p. 53 鬱蒼と	p. 43 同	p. 522 同
p. 11〈下〉苛酷な検閲	p. 59 同	p. 65 同	p. 51 同	p 528 苛酷な検閲
p. 14〈上〉『金瓶梅』	p. 65 同	p. 71 同	p. 56 同	p. 531『金瓶梅』
p. 14〈上〉旅館	p. 65 割烹旅館	p. 71 同	p. 56 同	p. 531 同
p. 17〈上〉茅の屋根	p, 73 同	p. 79 同	p. 63 同	p. 536 茅の屋根
p. 19〈上〉楡の樹	p. 77 楡の樹	p. 84 同	p. 67 同	p. 538 同
p. 20〈下〉媚び方	p. 81 同	p. 88 同	p. 70 同	p. 540 媚び方
p. 21〈上〉遠い路次	p. 82 遠い路地	p. 89 同	p. 70 同	p. 541 同
p. 22〈上〉二ケ月後	p. 84 二ケ月後	p. 92 二カ月後	p. 73 二ケ月後	p. 542 二カ月後
p. 29〈下〉鉦を鳴らし	p. 104 同	p. 113 同	p. 89 同	p. 553 鉦を鳴らし
p. 34〈上〉大時代な台詞	p. 117 同	p. 127 同	p. 100 同	p. 561 大時代な台詞
p. 37〈下〉『芥子園画伝』	p. 124 同	p. 135 同	p. 106 同	p. 565『芥子園画伝』
p. 38〈上〉三ケ月ほど	p. 125 同	p. 136 同	p. 107 同	p. 566 同
p. 38〈下〉玻璃の窓	p. 126 同	p. 137 同	p. 107 同	p. 566 玻璃の窓
p. 40〈下〉ざはめく影の	p. 131 同	p. 142 ざわめく影の	p, 111 同	p. 同